

# 学校教育目標の推移に関する一考察

—主として小・中学校の実態を通して—

中 川 幸 次

戦後、新しい学校教育の目的・目標は、教育基本法と学校教育法に明確に規定された。これを受けて各学校では、教育目標を設定し、その具現化に努めて来た。戦後30有余年の各学校の教育の歴史は、教育目標の推移に込められていると言えるだろう。

このような観点から、県内小・中学校の教育目標の推移に着目し、その傾向を知りたいと考えた。この研究報告書は、各学校の教育目標の実例に基づいて、設定（改訂）の状況、表現内容、表現の型等について調査し、考察を加えたものである。この調査・研究の成果が新教育課程の全面実施の時期に当たって、学校教育目標を具現化するための考え方や教育実践の支えになればと願っている。

## I 研究計画の概要

### 1. 研究の意図

昭和22（1947）年に、教育基本法・学校教育法が制定され、学校教育の目的・目標が明らかにされた。また昭和22年版「学習指導要領一般編」（試案）に「教育の一般目標」が示され、さらに昭和26年の改訂版に「教育の目標」について言及されている。戦後の教育改革の一環として、学校における教育目標を設定することが大きな課題となり、かなりの困惑の状態が続いたようである。戦後35年間の学校教育の経緯のなかで、教育目標の設定と具現化について研究や実践が行われてきたけれども、まだまだかなりの課題が残されているように思われる。

最近では、学校の教育目標に対する関心が高まり、その具現化への努力が積極的になされている傾向が見られる。「学校教育目標の具現化をめざして」「教育目標の具体化とその実践」「学校教育目標の達成をめざす学校経営の発想」「重点目標具現化における問題点及びその改善方策について」「主体性を培い創造力を伸ばす各教科の実践的研究—教育目標の実現をめざして—」等々の主題によって意図的な研究や実践が進められて来ている。

しかし、その反面、学校運営の改善を図る実際の場面では、学校の教育目標に対する教職員の共通理解が浅かったり、具現化への組織や態勢に問題がひそんでいるようにも思われる。

私が、ここで、着目したいと思ったことは、学校教育目標の具現化を望ましい方向に進めるために、先ず、その推移の実態を明らかにすることである。

戦後の教育転換期に県内の小・中学校では、どんな考え方で、どのようにして教育目標を設定したの

か。戦後35年間に教育目標が設定（改訂）されてきた状況はどうであったのか。教育目標の表現内容にどんな変化が見られたか。教育目標の表現の型にどんな傾向があったか、等々について主として考察の目を向けてみたいと考えた。

このような学校教育目標の推移に関する調査・研究の成果を踏まえてこそ、現時点における学校教育目標の具現化が効果的に実現できるものと考えて、この研究に取り組んだ次第である。

## 2. 調査と考察の方法

### (1) 調査の対象

県立教育センターの「教頭研修」「教務主任研修」参加者100名の在職校を調査対象とした。統合等の事情で、調査の条件を満たし得ない学校は除外し、実際に考察の対象とした学校は、小学校55校・中学校27校・合計82校である。

### (2) 調査の時期

昭和55年6月から同年9月

### (3) 調査の内容

＜調査Ⅰ＞ 本年度の学校の教育目標・年度の重点目標・努力事項

＜調査Ⅱ＞ 学校教育目標の推移調査

昭和22年から55年まで、各学校での教育目標の設定（改訂）が行われた年度ごとに実際の目標を書いてもらう。

### (4) 調査結果の集約と考察の方法

上記、調査Ⅱ「学校教育目標の推移調査」の結果を主体とし、昭和22年から昭和55年の間の教育目標の設定（改訂）の状況を考察した。

設定（改訂）の状況や、表現内容等の考察に際し、全国調査との対比を試みるため、埼玉大学、上滝孝次郎教授グループの「日本の学校教育目標」の時期区分や表現内容を参考にさせていただいた。なお、本研究報告の中間発表を県「教育月報」の昭和55年12月号に報告してある。

## Ⅱ 戦後転換期における学校教育目標設定の事情

### 1. 戦後の教育改革

終戦後、民主化への改革で教育も大きく転換した。昭和22年3月、教育基本法・学校教育法が制定され、新教育の基本的精神が明確にされた。

教育基本法は教育の目的を規定した。「人格の完成」「平和的な国家及び社会の形成者」「真理と正義」「個人の価値」「勤労と責任」「自主的精神」などが強調された。そして学校教育法は、各学校の目的・目標を規定した。

さらに、これと期を同じくして「学習指導要領一般編（試案）」が出され、その中に「教育目標」が示された。当時、各学校が自校の教育目標を設定するための有力な参考資料となったものと考えられる。

昭和22年版「学習指導要領一般編（試案）」の序論に「これまでとかく上の方からきめて与えられた

ことを、どこまでもそのとおりに実行するといった画一的な傾きのあったのが、こんどはむしろ下の方からみんなの力で、いろいろと、作りあげて行くようになって来た」と述べている。そして教育目標について「これを吟味してそこによりいっそう地方の実情に即した目標を定めて、教育の内容や方法を考へて行く出発点とすべきである。」ことを示唆している。さらに教科課程はどうしてきめるかについて次のように言及している。「教科課程は、それぞれの学校で、その地域の社会生活に即して教育の目標を吟味し、その地域の児童青年の生活を考へて、これを定めるべきものである。」

このことからわかるように、戦後最初の学習指導要領は、地方の実情に即した教育目標を定めて、教育の内容や方法を考へて行くべきことを方向づけている。そして「第1章教育の一般目標」に具体的な教育の目標を4つの面からあげている。1. 個人生活(7項目)、2. 家庭生活(3項目)、3. 社会生活(9項目)、4. 経済生活および職業生活(6項目)にわたり、かなり詳細な内容が示されている。

このような基本的な方針は、昭和26年(1951)の改訂版「学習指導要領一般編(試案)」に保持されている。すなわち「I, 教育目標」には、1. 教育の目標を定める原理、2. 教育の一般目標、3. 小学校・中学校・高等学校の目標、4. 教科の目標などについて言及されている。

戦後の転換期における新しい教育の精神は、教育基本法、学校教育法、「学習指導要領」によって、教育の目的・目標として示された。特に、当時、各学校が新しい教育の方向を模索していく有力な手がかりとなったのは「学習指導要領」に示された教育目標への考え方であったと思われる。しかし「学習指導要領」で示唆しているような「地方の実情に即した目標を定め」るためにかなりの混乱があったようである。占領政策下という特殊事情もあり、地方の教育の混迷状態の故に各学校における教育目標の設定にかなりの困惑の様子が見られたようである。

## 2. 県内の戦後転換期における事情

国の教育改革の方針に基づく新教育の推進は県内でもいろいろな立場からひたむきな模索が行われた。県教育行政の立場でも学校教育研究指定校の体制が発足し、「新教育の自主的学習の研究」が積極的に手がけられた。そして昭和23年5月にGHQのカーレー博士の教育実験学校の構想に関する講演がきっかけとなり、「学校教育研究指定校設置要項」ができた。これらの事情については「新潟県教育百年史」(昭和後期編)にその経緯が記述されている。

学校の教育目標の設定に関する当時の事情について、指導者であった新潟大学高田分校の井上春雄教官が、県指導課発刊の「研究紀要」第1号に「研究指定校について」という特別論文を寄稿している。少し、長いけれども貴重な資料と考えるので関係箇所を紹介させていただくことにする。

カーレー博士の実験学校は「定義の第2として実験の目標を持つことである。これは教育の一般的目的を達成するための具体的目あて即ち特定の目標を採るのがよい。更に具体的に言うなら、教育法規に出ているような大きな一般目標であったり、また細々とした小目標でない方がよい。」「研究の出発に当たって新潟軍政部のメーヤー女史の示唆で、各学校の教育の目標達成を実験目標とすることにした。しかし回顧するところに出発に当たっての混乱があったように思う。学校の教育目標というものは終戦後の教育に始めて登場したようなもので、従来、各学校がそれぞれ教育の目標をたてる等のことはなか

った。学校の教育目標とは何かを研究することと実験目標をきめねばならなかったのと同時に並行したので疑義のあるままに実験に突入してしまった感があった。この間に実験学校自身は学校の教育目標の真意を捉え得たとしても隣接学校がただ脇から聞いたり見たりしていたのでは不可解なものとなっていないかといまでも思われる。」

この見解から察知できるように、実験学校の設置に伴う実験の目標と、学校の教育目標とが混乱していたことは事実のようである。メーヤー女史の示唆のように「各学校の教育目標達成を実験目標とすることにした」という記述から考えれば、当然、各学校には教育目標が設定され、その「教育目標達成の過程」を実験目標と定めたものと思われる。しかし実験学校そのものにも両者の混乱は避けられなかったように見受けられる。(表1 参照) 井上教官の指摘のように「学校教育目標とは何か」を研究しなければならなかったことと並行して「実験目標をきめねばならなかった」ことに混乱の要因があったのではなかろうか。だから実験学校の研究発表を受けて自校の学校教育目標の設定に取りかかった各学校では十分な理解ができず当惑したようであり、学校の教育目標が本来意図している方向で設定されたといえない面があったようである。

国が、教育の一般目標の基準として「学習指導要領一般編(試案)」に示したことは前述した通りである。井上教官もこれに触れたあと「ところが県下の指定学校が発表している教育目標が1項目位であったことと、他方実験目標との関係にも理解が十分でないためにいろいろと混乱があったように思う」と述べている。そして「学校の教育目標は生徒が自己の目標を達成するのを助ける所にある。」だから教育目標は「できれば数項目位としたい。」とし、「掲げられた目標項目はすべてが達成されるように努力を払われるものであるが、この目標達成の過程をいま実験目標に」とり「学校の教育目標の中一つか二つを特に実験目標として公示したのであった」ことを指摘している。

戦後の転換期において学校の教育目標の設定が、「学習指導要領一般編(試案)」に示された教育目標の考え方が必ずしも十分に普及しなかったように見えるのも実験目標をめぐる混乱に起因していたのかもしれない。さらに「必ずしも教育の専門家でない進駐軍関係者との言葉や慣習の違いからくる誤解も手伝って気苦労の多いことであった」(丸山新七先生「これからの学校を考える」)という指摘のように、占領政策下という特殊の事情を加味しなければならないと考えられる。

ところで、当時研究指定校の教育目標はどんなものであったのか。次に若干の考察を加えてみたい。

3. 戦後初期の学校教育目標

(1) 研究指定校の教育目標

表 1. 昭和25年・研究指定校の教育目標

<小学校>

ア めあてともくろみをはっきり持って、つとめを果そう。	イ 仲よく力を協せよう。
-----------------------------	--------------



<p>ウ 1. よいことをする勇気のある子供 2. 健康な明るい子供</p> <p>エ 本を読む事の好きな子供にならしましょう。</p> <p>オ わかるまで見たり考えたりしよう。</p> <p>カ よくお話を聞き、相手にわかるようにお話を する。</p> <p>キ 自由に発表し行動し得る学校生活の実現。</p> <p>ク 互いに敬愛しつつ、自主的精神を涵養する</p> <p>ケ よく考え、力を合わせて働く態度を養う。</p> <p>コ 自主精神の助長。</p> <p>サ 人の話をよく聞き、自分の考えをはっきり いわれる子供にならしましょう。</p> <p>シ 協力する子供。</p> <p>ス 気持ちを素直にしかも美しく表現する態度と 能力を養う。</p> <p>セ 音楽を中心とする情操教育</p> <p>ソ 1. 郷土の自然現象を主とした継続観察を 指導して児童の科学性を陶冶する。 2. 新入学児童中より身体虚弱児を選定し 養護教育を実施する。</p>	<p>タ 自分の考えをはっきり言い表わせる子供に なしましょう。</p> <p>チ 思うことをはっきり言える子供。</p> <p>ツ 正しいことばでわかりよく話す態度を養う。</p> <p>テ よいことばでわかりやすく話す態度を養う。</p> <p>ト ことばを広い社会的手段として用いるよう な要求と能力を養う。</p> <p>ナ 正しく明るい言葉。</p> <p>ニ 「はなしことば」の教育</p> <p>ヌ よくわかる発表をしよう。</p> <p>ネ 国語面における基礎力をつける。</p> <p>ノ 工夫創作の力を養う。</p> <p>ハ みんなと明るく楽しく生活出来るような態度 や能力を養う。</p> <p>・協力する子供                      ・健康な子供 ・明るい子供                      ・自分でする子供</p> <p>ヒ すこやかできまりのよい子</p> <p>フ 丈夫で身だしなみの良い子供にする。</p> <p>ヘ 健康を増進する。</p> <p>ホ 健康教育</p> <p>マ みんなで健康な楽しい生活を築きましょう。</p>
---	---

<中学校>

<p>ア 学校をきれいにし、清潔を好む習慣をつくる。</p> <p>イ (1) 郷土及び国家の現状と伝統について正しい 理解に導き、その振興についての意欲と実行 力及び研究的態度を養う。 (2) 生徒の社会的活動を促進し、責任感と協力 心を涵養する。 (3) 生徒の個性を伸長し、その生活を充実し、 社会へ貢献する実践力を培うため次の目標の 達成に努める。 (イ) 衣食住、産業等についての基礎的な理解 と技能の涵養。</p>	<p>(ロ) 国語を正しく理解し、使用する能力 の涵養。 (ハ) 数量的関係を正しく理解し処理する 能力の涵養。 (ニ) 自然現象を科学的に観察し、処理す る能力の涵養。 (ホ) 健康安全で幸福な生活のために必要 な習慣の養成と身心の調和的発達。 (ヘ) 生活を明るくし豊かにする音楽、美 術、文芸などについての基礎的な理解 と技能の習熟。</p>
---	--

<p>(4) 社会に必要な職業について、その基礎的な技能、勤労の態度及び個性に応じて将来の進路を選択する能力の涵養。</p> <p>ウ 計画を立てて生活しよう。</p> <p>エ 学習の計画性の涵養。</p> <p>オ 学習活動における基礎能力の伸長。</p> <p>カ 自発性と自治能力を養う。</p> <p>キ 上品な明るい生徒の育成。</p> <p>ク 筋道を立てて進んで実行する生徒。</p> <p>ケ よい習慣と正しい知識に基づく健康生活の実現を図る。</p> <p>コ 責任感と協同心の育成。</p> <p>サ 責任を重んじて行動する態度を養う。</p> <p>シ 自分で計画して生活しよう。</p> <p>ス 自分の考えを自由にはっきりと発表し、他人の意見はすなおな気持ちで聞くこと。</p> <p>セ 読書力をつけて発表力をのばす。</p> <p>ソ 読書力（2か月ごとに目標を立てる。）</p>	<p>タ 個性に適した職業を選ぶ能力を養いましょう。</p> <p>チ 読書力の向上。</p> <p>ツ よく働ける人であり、同時にまた豊かな教養の持主。</p> <p>テ 職業人を目指す学校社会にいたしましょう。</p> <p>ト 学びながら働き、自己に適した職業をえらぼう。</p> <p>ナ 丈夫ではきはきした生徒にする。</p> <p>ニ より美しき身体。</p> <p>ヌ 健全な身体をつくろう。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・科学的態度を身につけよう</li> <li>・勤労を好む態度を身につけよう</li> <li>・楽しい生活をしよう</li> <li>・よい社会人となろう</li> </ul> <p>ネ 批判力と寛容さをもって協力し合う人間を育成する。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・よい習慣と正しい知識により健康の増進をはかる。</li> </ul>
--	---

「表1」に示したように、研究指定校の教育目標は多様である。前述したように、いわゆる学校教育目標と実験目標の混乱がうかがわれる。多くは、学校の教育目標のうちの一つを目標達成の実験目標として掲げているように見える。61校の小・中学校中52校（85%）が1項目の教育目標を設定している。

1項目でも「本を読む事の好きな子供にならしましょう」というようなきわめて具体的に子供の側に立ったものがある。また同じ1項目でも「互いに敬愛しつつ、自主的精神を涵養する」「よく考え、力を合わせて働く態度を養う」という具合に教師の側に立った目標がある。そうかと思うと「音楽を中心とする情操教育」「健康教育」「『はなしことば』の教育」というように学校経営の方針の一つと思われる場合がある。表現の方法にせよ、内容にせよ、かなりまちまちのようである。さらに、中学校では多項目の目標を掲げている学校があり、学校教育法にある学校の教育目標をほぼ自校の教育目標としている例も見られる。

次に、「表1」の表現内容の傾向に目を向けてみたい。

小学校では、一部を除いて、児童の具体的な生活行動に密着した内容のものが多し。中学校でも、生徒の生活行動の実態に基づいていると思われるがやや抽象化された内容になっている。

内容として最も特質のあるのは「正しい発表力」に関するものであり、約22%を占めている。終戦後における県の地域性としての特性であろうか。「よくお話を聞き、相手にわかるようにお話をする」「自

分の考えをはっきり言い表わせる子供になりましょう」「正しいことばでわかりよく話す態度を養う」等のように正しい言葉で話す子供を育てようとする意図が強くうかがえる。次いで「健康」が約13%、「協力性」が約9%である。中学校だけではあるが「職業選択能力」に関する内容が最も多いことも大きな特質といえる。

(2) 戦後初期における学校教育目標の設定状況

前項において、研究指定校の教育目標を通して、戦後の転換期における事情を考察した。ここでは、調査結果に基づいて、昭和22年から27年までの学校教育目標の設定状況に考察の目を向けてみたい。

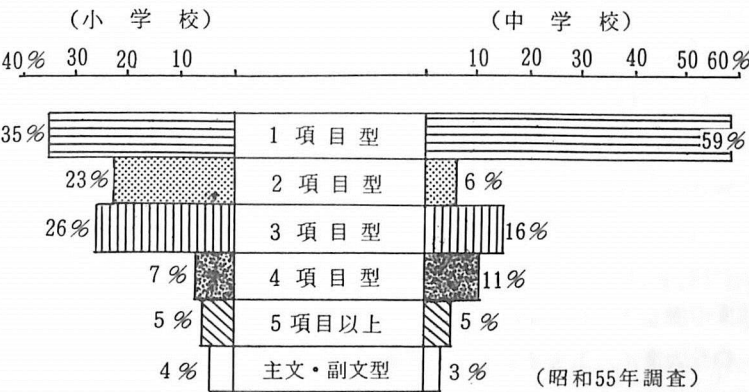
表2 教育目標の設定(改訂)の推移(昭和22年~27年)

校種 目標 項目	小 学 校 (55校)							中 学 校 (27校)							合 計 (82校)									
	1	2	3	4	5 以上	主 文 副 文	計	率%	1	2	3	4	5 以上	主 文 副 文	計	率%	1	2	3	4	5 以上	主 文 副 文	計	率%
昭和22	1	1	5	0	1	1	9	16	0	0	2	0	0	0	2	7	1	1	7	0	1	1	11	13
23	6	3	4	1	1	0	15	27	2	0	1	0	0	0	3	11	8	3	5	1	1	0	18	22
24	14	7	8	3	0	2	34	62	13	1	1	3	0	1	19	70	27	8	9	6	0	3	53	65
25	15	9	5	3	2	0	34	62	9	1	2	2	2	0	16	59	24	10	7	5	4	0	50	61
26	14	8	10	2	2	0	36	65	6	1	3	2	0	0	12	44	20	9	13	4	2	0	48	59
27	4	6	7	2	1	3	23	42	8	1	1	0	1	1	12	44	12	7	8	2	2	4	35	43
計	54	34	39	11	7	6	151		38	4	10	7	3	2	64		92	38	49	18	10	8	215	
率%	35	23	26	7	5	4			59	6	16	11	5	3			42	18	23	8	5	4		

(昭和55年度査)

(昭和55年調査)

図1 昭和22年~27年間の教育目標の表現の型



イ 表現の型

教育目標の表現の型について、昭和22年から27年の間の傾向は、「表2」「図1」に示した通りである。分類は項目数によるものと、主文があってさらに具体的にいくつかの副文のある表現を独立して考えた。「図1」によってわかるように、6年間の集計によると1項目の表現による教育目標が一番多い。中学校では59%が1項目型であることはきわめて大きな特質である。3項目型、4

ア 設定の状況

昭和22年から27年までの教育目標設定状況は「表2」に示した通りである。小・中学校ともに昭和24年に教育目標の設定が急激に増えたことがわかる。小学校で62%、中学校では70%である。小学校では以後25年・26年と60%以上の学校で設定(改訂)が続けられている。中学校でも25年に59%、26年27年に44%の学校で設定(改訂)されている。24年に急増したのは県教委の研究指定校を通しての研究、啓蒙による影響と考えられる。

そして、各年度に40%から70%に及ぶ教育目標の設定(改訂)が行われていることは、各学校では教育目標を毎年か隔年に改訂したものと考えられる。

項目型がこれに次いでいるが、16%、11%と少ない。小学校でも1項目型が35%で最も多く、次いで3項目型が26%、2項目型が23%である。年度ごとに追ってみると、小学校では、24年、25年、26年と1項目型が最も多いが、27年には3項目型が多くなっている。中学校では、24年から27年まで1項目型が圧倒的に多いことがわかる。これは、当時研究指定校が、教育目標（実験目標とも考えられる）を85%の学校で1項目で表現した事実の影響と考えられるであろうか。

では、当時の教育目標の実例から考えてみよう。

#### A小学校

- 昭和23年    ◦ 複式学級の経営研究    ◦ 進取発表力の養成    ◦ P T A 強化と文庫拡張
- 〃 24年    ◦ みんな仲よく進んでだれとでも話のできる子を育成する。
- 〃 25年    ◦ みんな仲よく進んでだれとでも話のできる子供になりましょう。
- 〃 26年    ◦ 礼儀正しくだれとでも話のできる子供を育成する。
- 〃 27年    ◦ 礼儀正しくだれとでも話の出来る子供になりましょう。

A小学校の場合、23年から27年まで毎年教育目標が改訂されている。23年は教育目標というより学校経営の方針と考えるべきであろう。22年と23年には、多くの学校で、A校と同様に経営の方針のように述べられている。24年から27年までは、1項目の型で表現されている。ただ内容を見ると「みんな仲よく」「進んで」「だれとでも」「話のできる」というようにいくつかの資質をこめた表現に思われる。5年間一貫している点は「進取発表力」から「話のできる子供」が通されていることである。24年と25年は内容は同じであるが、24年では「話のできる子を育成する」と表現され教師の側に立っており、25年では「話のできる子供になりましょう」で、子供の側に立っている。26年と27年、さらに28年と29年の教育目標が同様の関係で設定されている。A校では、30年以後はとんど3項目の教育目標で数回改訂が行われ、53年に「よく考え、助けあってがんばる子」という1項目の教育目標が設定されて現在に至っている。

#### B小学校

- 昭和22年    ◦ 自主的学習態度の樹立    ◦ 社会道徳・正しい言葉の徹底
- 〃 23年    ◦ 人を尊敬し、物を大事に、工夫する子どもを養う。
- 〃 24年    ◎ 明かるい学校（◦ 仲よく力を合わせる。◦ 進んで発表する。）
- 〃 25年    ◦ 仲よく力を合わせる。◦ 進んで発表する。
- 〃 26年    ◦ 丈夫なからだをつくる。◦ 進んでよいことをする。
- 〃 27年    ◦ 丈夫なからだ。◦ 正しいことば

昭和22年では、学校経営方針のように思われる。23年は教師の側に立っており、24年以後は、子どもの側に立った表現である。22年から一貫して2項目で表現され、内容は、個人的・社会的

な両面から構成されている。「正しい言葉」「進んで発表する」という内容は、戦後当初における県内の特質である。「自主的」「進んで」「丈夫なからだ」という個人性と、「尊敬」「仲よく」のような社会性の調和に配慮が見られる。1項目とせず、わかり易く2項目に整理された教育目標である。24年の教育目標について次のような適切な説明が加えられている。「雪国共通の地域性の上に校舎が古いため、校舎内が暗く、児童の性格は発らつ性に乏しく、社会性も貧困である。対人関係における正しいことばづかいが未熟であり、自分の所信を発表する意欲が低調である。」

### C 小学校

昭和23年 (当校教育事情と将来の目標)

○衛生教育の重視 ○不良化防止 ○各種文化運動

- 〃 24年 (1) じょうぶな体をつくりましょう。 (2) みな、なかよくいたしましょう。
- 〃 25年 (1) 身のまわりをきれいにしましょう。 (2) みんな仲よくいたしましょう。  
(3) しっかり勉強いたしましょう。
- 〃 26年 (1) 身のまわりをきれいにする。 (2) 礼儀正しい子どもになる。  
(3) すすんで勉強する子どもになる。
- 〃 27年 (1) すすんで勉強しよう。 (2) 礼儀正しくしよう。  
(3) 身のまわりをきれいにしよう。

C小学校では、説明に次のことが付記されていた。「23年度では『教育』ではなく『将来』の目標として示されている。24年度より『参考事項』の欄に『教育目標』が設定される」23年は「将来の目標」として定められ、24年度より子どもの側に立った表現の教育目標が設定されている。24年度には「健康、体力」と「協力」の2面から考えられた。25年は「清潔」と「勉強」が加えられて改訂され、3項目となった。26年には「協力」が「礼儀」に改訂され、27年には「勉強」が(1)となり強調されたようである。教育目標の見直しが積み重ねられ、年々重点化の意図が十分に見取れる。当校では、30年まで毎年教育目標が改訂されている。

### D 中学校

昭和24年 清潔を好み、礼儀正しい生徒になりましょう。

- 〃 25年 自ら計画を立てて自分の仕事を処理し、自主的な意見と明確な責任をもちましょう。
- 〃 26年 計画を立てて物事を実践し、協同親和全体に役立つ人となりましょう。
- 〃 27年 自ら計画を樹てて、自分の仕事を処理し、自主的な意見と明確な責任をもちましょう。

D中学校では、24年から27年まで1項目の教育目標で通している。中学校では多くの場合このような傾向が見られるが1項目といっても、その中に含まれる資質は多面にわたっている。24年は具体的な生活行動に密着し「清潔」「礼儀」のある生徒を目指している。25年、26年は、個人的な面と社会的な面を考慮した資質の育成を期待している。24年から27年まで一貫して生徒の側に立った表現をとっている。25年の教育目標を27年に再び掲げているのは何かの意図によるのであろう。

#### E 中学校

昭和22年	{	1. 個性尊重の教育（自主学習への導入，自治活動の啓培）
「		2. 科学教育の振興（科学性の陶冶，生活の合理化）
24年		3. 健康教育（体育の生活化，衛生思想の普及徹底）
「 25年	{	1. 他人を正しく知り互いに助け合い自ら進んで働く人にならしましょう。
		2. 自ら進んで学び正しく発表する人にならしましょう。
		3. 健康な心と身体をつくり明るく豊かな生活をする人にならしましょう。
「 26年	{	1. 自ら学び，すなおに聞く人にならしましょう。
「		2. 自ら学び，正しく発表する人にならしましょう。
28年		3. 自ら学び，進んで行う人にならしましょう。

E中学校では、昭和22年から24年までは、教育目標としてというより学校経営の方針として、取り組もうとする教育の方向を示している。25年には、3つの立場から、こんな生徒になろうという姿が具体的に描かれている。個人的な面と社会的な面の両面から考えられているし、知徳体という立場から全人的に生徒像を描こうとしているように思われる。現在考えられている教育目標に近いと言えるのではなかろうか。26年からの教育目標では「自ら学び」をすべて前提とし、「すなおに聞く人」「正しく発表する人」「進んで行う人」というように一貫した生徒像が打ち出されている。

以上、5校の例を通して戦後当初の教育目標の特質について概観した。多くの学校では、22年23年は教育目標としてというよりは学校経営の方針のように定められていることがわかる。24年からはほとんどの学校で教育目標が設定され始めた。1項目で定められたものが多かったが、その内容を見るときわめて生活に密着した具体的な目標の表現や、1項目であっても、2つ以上の資質を含めた表現の例もある。特に中学校の場合、1項目でいくつかの資質を含めて表現している場合が多い。

県の研究指定校の大部分が、その研究報告書に1項目の教育目標を掲げていることの影響は、県下の小・中学校に及んでいたことが推測される。その影響は調査結果の数値だけでなく、教育目標の表現内容にも及んでいることは、示した5校の例からもいえるのではないか。学習指導要領で示された教育目標の考え方と若干のニュアンスの違いがあったように感じられる。



## ウ 表現内容

「表3」は昭和22年から27年まで6年間の教育目標215例の表現内容の頻度数の順位を示したものである。埼玉大学の全国調査と対比して、特質をとらえてみたい。

上位で共通していることは「自主性」が一致して最も多いことがわかる。「健康」は県が2位、全国が3位とほぼ共通している。「明朗」もほぼ共通していることがわかる。県の最も特質と考えられることは「はっきり話す(発表力)」が3位を占めていることである。戦後転換期当初における県の独自の傾向であろう。研究指定校の「教育目標達成の過程」に報告されている教育目標の表現内容も「発表力」が最も多かったことが、県内の各学校に影響しているように考えられる。「協力」についても県独自の傾向といえる。さらに「学力・学習態度」が教育目標に多いのは終戦直後の県の教育動向が、新しい教育

表3 教育目標の表現内容  
(昭和22年～27年)

順位	全国(埼玉大調)	新 潟 県
1	自 主 性	自 主 性
2	真理の愛好	健 康
3	健 康	はっきり話す(発表力)
4	明 朗	協 力
5	個性の尊重	学 力 ・ 学 習 態 度
6	生 活 力	明 朗
7	責 任	よ く 考 え る
8	正 義	礼 儀
9	勤 勉	規 律
10	勤 労	美 し さ
11	奉 仕	責 任
12	美 し さ	基 礎 能 力
13	実 践 力	計 画 性
14	努 力	豊 か な 情 操
15	趣味をもつ	奉 仕
16	礼 儀	勤 労
17	規 律	最後までやり通す
18	合 理 性	科 学 性
19	情操豊か	個 性 の 尊 重
20	誇りをもつ	正 義

教育の方向として自主的学習の教育に積極的に目を向けられていたことによるのかも知れない。新潟県教育百年史によれば、「本県新教育研究は、21年度は主として自主的学習を対象として行われ」「22年度は「新教育の自主的学習を研究する」ことで研究校が指定され、研究発表会が各校で開かれている。「自主性」が多いことも「自主的学習」の研究を通して新教育の精神が各学校に啓蒙普及されて行った事実を物語っているのではなかろうか。

全国で割合上位にある「真理の愛好」は県には20位までに見られず、「個性の尊重」がようやく下位にあるに過ぎないし、「生活力」も見られないことに特徴がある。同じような傾向は「正義」「勤勉」「勤労」についてもいえる。また、県の上位に見られる「よく考える」は全国では20位内に見られず、「礼儀」「規律」は全国では下位にしか見られない。

## エ 設定の理由

上滝孝治郎教授グループの「日本の学校教育目標」によれば、「『自主性』の重視は、戦前における封建的画一主義の打破にとっての不可決の要素であり、また『個性の尊重』の重視も、これまでの抽象的全体への『滅私奉公』の否定を意味するものとみられる。こうした傾向は、従来の、国家に奉仕する有用な道具としての個人の理解から脱して、個人の価値と尊厳を何よりも重視することをもってわが国新教育の根本方針とすべき」だとする考え方に基づくことを述べている。さらに「当時の各学校の教育目標の中には、地域を基盤とし、真理と正義を指標としながら、各自みずから自分の生活を切り開いていく上で現実役に役立つ有効な知識、技能を習得し、その実践に積極的に努力し、そのことを通じて、同時に理想社会建設の原動力として役立って行くことのできる人間の

形成が強く要求されている」ことを指摘している。

県内の教育目標設定の理由からも、多かれ少なかれ、このような考え方と一致している点が見られるが、県内の地域・父母・学校・子ども・教師の実態に基づく特性が見出せる。当時の研究指定校の記録から教育目標設定の理由を紹介してみたい。

#### ＜M小学校の例＞

◎ 教育目標 「人の話をよくきき、自分の考えをはっきりいわれる子供になりましょう」

◎ 目標設定の理由

目標設定に当っては、本校の児童の実態を把握し地域社会の特質を考慮して、目標として掲げるべき種々の問題を多面的に選択し、それに本校全職員の教育的識見の下に、種々検討を加えて決定したものでありまして、その理由の主なものとして次の諸点をあげることができます。

1. 民主主義精神の正しい理解のためには、意見の交換が立派にできることは絶対必要であること。
2. 多人数協同の生活を営むためには、自己の意見の発表が正しくできなければならないこと。
3. 自己の自由を主張し、束縛されない生活を営むためには、他の人の人格を重んじ、他の意見を素直に受容する態度が必要であること。
4. 自主的学習を高めるためには、討議研究の正しい態度が必要であること。
5. 本校児童には自分の考えをはっきり発表することにあまりなれていないこと。
6. 殊に他人の意見をきき入れる態度が不足していること。
7. 終戦後特に言葉が粗雑になった傾向があるので、言葉づかいに対する注意を喚起することができること。
8. 建設的な討議の仕方が不十分であること。
9. 地域的には、封建的色彩が濃厚で陰口をよくきくが堂々と所信を披歴する態度が乏しいこと。

#### ＜I小学校の例＞

◎ 目標 自由に発表し行動し得る学校生活の実現

◎ 目標の設定

1. 世の中がひっくりかえたような、終戦直後の混乱は、この地域にももちろん見られた。列車の窓ガラスを故意に破って乗降するような、一例を挙げてみても、それは子供の教育上誠に不幸な数年であった。「教育は環境である」とか。父母も教師も眼前の子どものふしだらを、どうにもできなかった時代でもあった。しかし、嵐の去ったような昨今でも訓育の上で、親達が、はっきり割り切った気持でいるとは思えない。民主的行動様式を、確信を以て説諭してみたいとか、責任、協同、礼儀というような自制面を一時も早く子供の行動に見たいとか、新しい訓練方式を理解し、この面で学校側に協力したいとか、このようなことは、

現在の親達の心からの願いのようである。(注、地域社会の立場)

2. 幸い教師としての私共は、この点で、新しい方向を見定めることができ、子供の行動に対する判断にも自信が持てるようになって来たが、新しい行動形式に戸惑いする子供達の姿を見ては、やさしく手をさしのべずにはいらなかった。特に私共が焦点をおいた、近代学習としての単元学習において、学習秩序の不確立が隘路となって、思うような効果の収め得ないことが反省された。

- 協同作業の時など、興味のあまりか、どうも騒がしくなる、子供がうかうかして落ち着きがない。
- グループ学習では、仲間の仕事をしないと、させないと、仲間はずれにすると、非協力的な行動。
- 現場学習で見学の際、非礼の点で先生が赤面する。
- 話し合い相談の時など、権力者に威圧されて思うことが言えないという声、発言は巧だが実行の責任の裏づけのない者。
- 男女の対立がはびこる。

一か年の実践反省から、全職員一致した意見は、次の諸点であった。

- 教室では、児童各自の自主的発表態度が確立されねばならぬこと。
  - 友愛の情に満ちた、相互尊重の態度を基底に持つ、民主的級風を作り出さねばならぬこと。
  - 共同学習の効果を挙げるためには、責任と協力の態度を確立させねばならぬこと。
- かくして、次年度カリキュラム再構成の焦点に、このことの具現が必要であると要望されたのである。(注、教師の立場)

3. 一方、友愛と協力に満ちた、自由に発表し行動し得る学校社会の実現は、大多数の子供達の強く要望している所でもあった。それは、しばしば自治会の議題となり、或はグループの訴えとなり、また個人として非難や訴えとして聞かされたりした。また伝統的な強さをもつ部落の子供集団は、ともすれば封鎖性に立てこもり易く、しばしば排他的であろうとする。悪くすると親分子分的な組織を持ちたがり、幼弱なものにとっては、とかく束縛感を与えることが多かったようである。部落近隣の集団の義理で行動がしばられ、子供が悪い遊びをしていても、子供以上に近所への体裁を気にする親達は、精々で自分の子供を消極的な参加に留めさせておきたい位な態度しかとり得なかったのである。よい子供社会ができ、自分の子供が自主的な判断で生活を律してくれたらという親達の願いは、ただひたすら学校への期待となってくるのが現況である。(注、子供の側)

以上は、地域社会と教師の立場と子供の側との三点から目標設定の根拠を述べたものである。

(県教委指導課発刊 研究紀要第一集より)

少し多くなったが、戦後当初における県内の学校の実態をとらえるために二校の実践例を紹介した。戦後の社会の混乱の中で学校が取り組んだ教育への姿勢の厳しさが感じ取れる。民主主義教育への転換の問題以前に荒廃した社会の中での基本的な生活習慣の回復に大変な苦勞があったようである。

全国調査では、どちらかといえば個人的資質に関係したものが強調されているが、県内の場合には必ずしもそうは言い切れないようである。「協力」「礼儀」「規律」が高順位に見られるのも、社会的資質の面が、生活の中で求められていることでもわかる。全国調査で見られない「はっきり話す（発表力）」がきわめて上位を占めており、先にあげた二校の教育目標設定の理由からも推察される。M校の教育目標で「人の話をよく聞き」とあるように、自らの考えを主張する前に人の話をよく聞き、理解することが前提とされている。教育目標設定の理由に、「多人数協同の生活を営むためには、自己の意見の発表が正しくできなければならない」という反面、「自己の自由を主張し束縛されない生活を営むためには、他の人の人格を重んじ、他の意見を素直に受容する態度が必要である」と述べている。

また、I校の教育目標「自由に発表し行動し得る」子供の育成を設定した理由にも、他人の立場を尊重する面がかなり強く述べられている。例えば、親達は「責任、協同、礼儀というような自制面を一時も早く子供の行動に見たい」と言っており、教師は「友愛の情に満ちた、相互尊重の態度を基底に持つ」ことを願っている。そして、子供は「友愛と協力に満ちた、自由に発表し行動し得る学校社会の実現を」強く望んでいるというのである。

このようなことから考えると、戦後当初の社会の混乱の中で民主主義教育を推進する過程には、自主性、個性の尊重という個人的資質の面の強調の反面、協力、礼儀、規律等の社会的資質の面に心を向け、調和のとれた人づくりに努力がなされていたことがわかる。

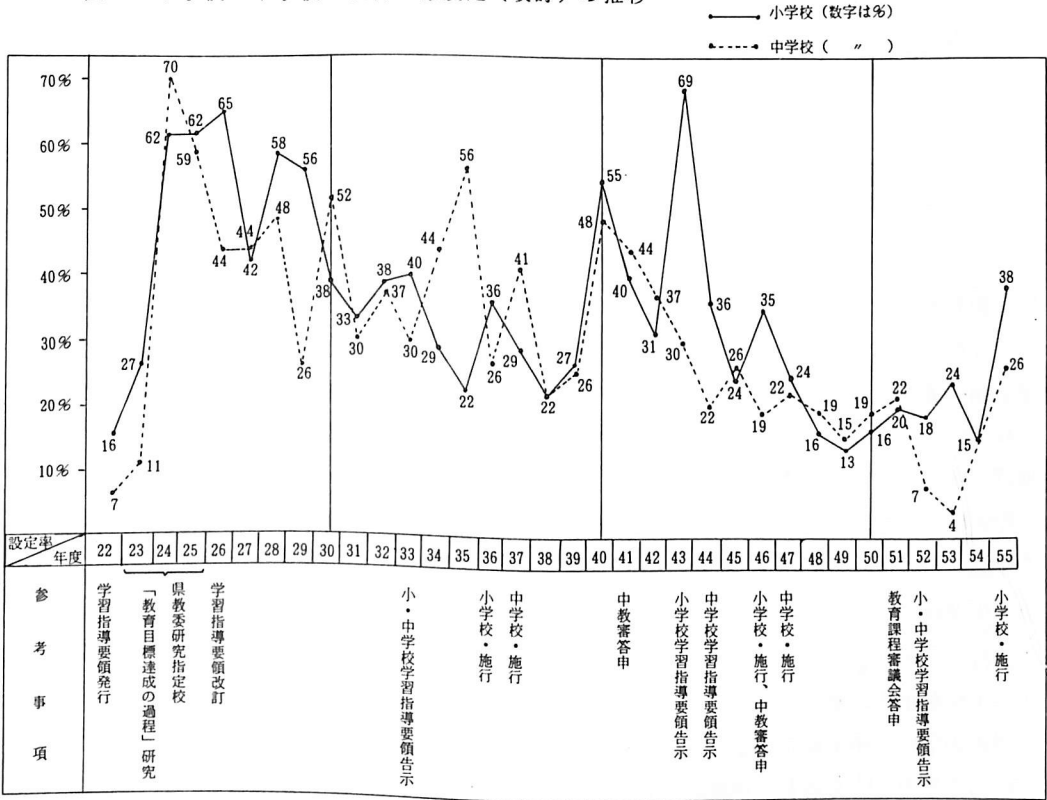
詳細は後述するが、県内の「自主性」「協力」は、35年後の現在まで、教育目標の最高頻度を保って設定されている。「はっきり話す（発表力）」は、昭和30年以後には教育目標としてあまり取り上げられなくなっている。戦後当初、社会の混乱の中で生活の秩序、規律として正しい言葉で話すことの重要性和、民主主義の考え方の普及に自由に自分の意見を発表するという立場から「はっきり話す（発表力）」が学校の教育目標として設定されたのではないだろうか。

Ⅲ 学校教育目標設定（改訂）の推移

1. 年度別の設定（改訂）推移

昭和22年から、55年までの調査対象校小学校55校・中学校27校に見られる教育目標の設定（改訂）の推移の状況の比率は「図2」に示した通りである。

図2 小学校・中学校の教育目標設定（改訂）の推移



(1) 概観

「図2」から小学校・中学校における教育目標の設定（改訂）の推移を考察してみたい。概観して  
いえることは、昭和20年代においては設定の度合いが大きく、30年代以降徐々に減少して来ている  
ことである。ただし、全体的には減少の傾向をたどりながらも、学習指導要領の改訂等の時期に教育目  
標の設定（改訂）の率が高くなっている。学校教育目標の設定（改訂）の推移が、国の教育に対する  
基本的な考え方の変化に深い関係があることを物語っている。以下年代別にその特性を追って見たい。

(2) 昭和20年代の傾向

これについては「Ⅱ」の(2)の「戦後初期における学校教育目標の設定状況」で述べたが、ここでは  
全体の傾向をとらえるに必要な要旨を取り上げることとする。

昭和22年の教育目標については、調査対象校で見える限りでは、ほとんどが、学校経営の方針として

考えられていたようである。23年もほぼ22年と同じようであるが、教育目標として表現内容が見られるようになった。24年に教育目標の設定が急増している。小学校では、24年・25年・26年では60%以上、28年・29年では55%以上になっている。中学校では、23年に11%に過ぎなかったのが、24年には70%となり、25年が59%、26年、27年が44%となり、29年には26%と少なくなっている。24年以後、大半の学校が毎年か隔年に改訂している。24年以後に急増しているのは、県教委研究指定校による研究実践の発表を通し、啓蒙が行われたことによるものと考えられる。また20年代に毎年設定(改訂)が多いのは、当時、研究指定校が発表している教育目標が1項目程度であり、実験目標との関係に十分な理解がなかったが故に混乱があったのではないかと考えられる。1項目の教育目標を1年間に重点的に達成に努力し、年々設定(改訂)していくものと考えられていたのではないだろうか。8頁、9頁に示した事例のように毎年教育目標の設定(改訂)がなされていた学校が大部分であったようである。昭和22年と26年の2回にわたる学習指導要領(試案)との関係は、県内における教育目標の設定(改訂)においても多かったものと思われるが、それにも増して、新潟軍政部のメーヤー女史の指導や、県教委研究指定校の実践発表の影響による所が大きかったように考えられる。

### (3) 昭和30年代の傾向

小学校では昭和30年の設定(改訂)が急減し、31年にも減少の傾向を示している。それが、33年の学習指導要領の告示を期にやや増大し、告示後2年間減少している。この間に教育目標の見直しが行われていたと解してよいだろうか。そして36年の小学校学習指導要領の施行年に急増しているのは、施行と同時に新しい教育目標に基づく学校教育の取組みがなされたものと考えられる。

中学校では若干異なった傾向が見られる。昭和33年の中学校学習指導要領の告示後、34年、35年と2年間にわたり急激に増大し、36年は減少したが、37年の施行年に増大している。30年代は、33年の小・中学校学習指導要領告示と、36年の小学校施行、37年の中学校施行の影響が、教育目標の設定(改訂)に明らかに関係しているものと考えられる。

### (4) 昭和40年代の傾向

昭和40年に、小学校が55%、中学校が48%と急増している。これはこの頃、県教委が、「学校教育実践上の努力点」を通し、学校の教育目標に対する指導に力を入れ、重点目標、努力事項、指導の重点の関連を明確にし、教育課程の大綱の作成に、各学校が真剣に取り組んだことによるのではないかと考えられる。合わせて41年に中央教育審議会の答申があり、「期待される人間像」が打ち出されたことによる影響も考えられる。

小学校では、41年、42年と減少しているが、43年の小学校学習指導要領告示の年に69%の学校で、設定(改訂)がなされていることは著しい特徴である。以後46年の小学校の施行年(中教審答申が行われている)にも35%の設定(改訂)が行われている。その後の3年間は徐々に減少の傾向を示している。

中学校では、40年をピークに、44年まで急激な減少を示し、以後も小幅の増減をみながら漸減しており、中学校学習指導要領の告示、施行等の影響があまり見られなくなっている。考えようによっては、教育目標に対する考え方が、恒常的なものとして定着してきたものとも考えられる。



## (5) 昭和50年代の傾向

40年代後半から、小学校・中学校共に、教育目標設定（改訂）の度合いが少なくなっている。49年に小学校13％、中学校15％と24年以来最も少なくなっている。小学校では、それ以後小刻みの増減を経て、小学校学習指導要領施行の55年に38％に急増した。中学校では、50年・51年と漸増し、52年・53年と減少した。特に53年は僅か4％に過ぎない。中学校でのこの現象は、56年の中学校学習指導要領の施行に向けて、教育目標の見直しを図り、新しい教育課程への準備期と考えることが妥当であろう。54年には15％となり、55年には26％の設定（改訂）率へと伸びているのは、56年の中学校の新教育課程の実施に向けての関心の深さの表われと思われる。

40年代後半から、50年代にかけては、各学校では、教育目標は、一般的には、恒常的なものという考え方が定着して来ているように感じられる。

## 2. 設定（改訂）の回数

「表4」は、昭和22年から55年までの34年間における教育目標設定（改訂）の回数を示したものである。

5回以下の学校は僅か5.1％であり、数年に1回の設定（改訂）を行なったことを示している。6回から10回が35.4％、11回から15回が41.8％、16回から20回が17.7％を占めている。最も多いのは11回から15回の学校で、次いで6回から10回が多い。6回から15回までを合すると77.2％であり約3年から6年に1回の設定（改訂）が多いことがわかる。

小学校・中学校別に見ると、中学校では88％が6回から15回であり、小学校は72.2％とやや少なく、16回から20回が22.2％とやや多くなっている。

各学校の設定（改訂）は全体回数でその傾向をとらえることはできるが、34年間に

表4 小・中学校教育目標設定（改訂）回数

（昭和22年～55年）

校 種 改訂回数	小学校	中学校	計
1回～5回	3校 (5.6)	1校 (4.0)	4校 (5.1)
6回～10回	17 (31.5)	11 (44.0)	28 (35.4)
11回～15回	22 (40.7)	11 (44.0)	33 (41.8)
16回～20回	12 (22.2)	2 (8.0)	14 (17.7)
計	54校 (100％)	25校 (100％)	79校 (100％)

における年代の推移の上からは、各学校間に特色ある傾向が見られる。「表5」に小学校5校、中学校3校について設定（改訂）年別の傾向の例を示してみた。

表 5 学校教育目標設定（改訂）年別傾向例

●印 設定（改訂）年

校種		年度	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	回数
小学校	A校		●				●		●								●							●													6回
	B校		●					●	●					●						●			●			●	●	●					●				10回
	C校		/	●	●	●	●	●	●	●			●					●			●			●											●		11回
	D校		/	●	●	●	●	●	●	●	●								●						●	●	●	●							●		14回
	E校		●	●	●	●	●	●	●	●	●		●			●		●		●	●	●	●			●	●							●	●		19回
中学校	F校		/	/	●			●		●						●									●												5回
	G校		/	/	●	●	●	●		●				●					●		●					●								●			10回
	H校		/	/	●	●	●	●	●	●				●		●		●			●				●			●	●	●							14回

小学校A校は22年に教育目標を設定し、恒常的な考え方で一貫した改訂の積み重ねが行われている例といえよう。B校もA校と同じ考え方に立っているように思われるが、26年から27年にかけての改訂と46年・47年・48年の3年間に連続して改訂を行っているところに特質がある。A・B両校の例は他に比べ、20年代に毎年、設定（改訂）をしていないことである。それに対し、C校・D校・E校は、昭和20年代には毎年、設定（改訂）を行っていた例である。「図2」に示した推移から推察したように、20年代にはこれらの例のような学校が多かったのである。C校は31年以後は3年ないし5年に1回の設定（改訂）が行われている。最近、55年まで10有余年間改訂されていない点に特質がある。D校は30年代から40年代初めまで1回の改訂があったに過ぎないのが、44年から4年間、毎年の改訂が行われている。E校は31年以後もかなりの改訂が行われており、調査対象校の中で最も設定（改訂）の多い学校である。

中学校のF校は設定（改訂）の少ない例である。20年代においても毎年、設定（改訂）されなかった例である。31年以降は、35年と45年の2回に過ぎない。G校は、24年から4年間、毎年の改訂が行われ以後、2年ないし数年の間隔での改訂が行われている。H校は、30年まで7年間、毎年の改訂が行われ、以後2年ないし4年の間隔で改訂が行われている。48年以後55年までは改訂が行われていない。

以上、8校の例から、各学校の特質を考察してみたが、各校の実状は、それぞれに異なった特質が見出せる。そして他の調査対象校の傾向も、例示した8校の傾向のいずれかの特質と類似している点が多く見られるようである。

3. 54年度学校教育目標の設定年度

昭和40年代後半から、教育目標の設定（改訂）の率が次第に低くなって来ていることは前述した通りである。これは教育目標を恒常的なものと考えることが定着して来たからではないかと言われている。

これについて、中越教育事務所管内の小学校、中学校について、昭和54年度の教育目標の設定年度に関する調査を実施した貴重な資料がある。「表6」がその結果である。教育目標設定（改訂）の推移の考察と関連させ、教育目標がかなり恒常的にとらえられている裏付けとして若干の考察を加えてみたい。

表 6 54年度小・中学校教育目標の設定年度

(54年度, 中越教育事務所学校指導課調)

年度		54	53	52	51	50	49	48	47	46	45	44	43	42	41	40	35 ~39	30 ~34	25 ~29	その他	計
小学校 266校	頻度 数	33	33	29	20	32	16	20	11	13	6	10	9	5	0	3	2	6	0	1	249
	%	13	13	12	8	13	6	8	4	5	2	4	4	2	0	1	0	2	0	0	100
中学校 108校	頻度 数	17	10	9	10	12	9	8	4	2	4	2	3	0	2	2	6	3	0	3	106
	%	16	9	8	9	11	8	8	4	2	4	2	3	0	2	2	6	3	0	3	100

54年度の小・中学校の教育目標の設定年度は、かなり古いことがわかる。小学校で、52年以後に設定されたもの、つまり3年以内のものを合計すると38%である。したがって、あとの約60%の学校が4年以前に設定していることになる。中学校では3年以内が33%で4年以前の設定が約65%である。50年以後、つまり5年以内の設定は、小学校では59%、中学校では53%である。6年以前の設定は小学校では約40%、中学校では約50%である。10年以前の設定は、小学校では約13%、中学校では約20%である。小学校と中学校を比べると、中学校の方の設定年度が古いことがわかる。昭和48年頃から、ほぼ、1割前後の学校で設定(改訂)されている。大体5年から7年で教育目標を見直し、設定(改訂)しているように推測できる。

#### IV 学校教育目標の「表現内容と型」の推移

##### 1. 「表現内容」の推移

戦後30有余年間、学校教育目標の「表現内容」はどのように変化してきたのであろうか。「表現内容」の推移をたどることから、学校教育で、どのような子ども像を描いているのかを探ってみたい。

小・中学校82校929例の教育目標に掲げられている言葉を分類・整理した。全国調査との対比を試みることを意図し、埼玉大学の調査の整理項目との関連を考慮し、同大の4期区分によって整理を試みた。ただし、第5期は独自に設定した。

第1期から第2期までは、ほぼ、数度にわたって行われた「学習指導要領」の改訂期と密接なかかわりがある。第1期は昭和22年の「学習指導要領」の時期にほぼ相当しており、第2期は昭和26年版、第3期は昭和33年版、第4期は昭和43年・44年版、そして第5期は昭和51年の「教育課程審議会答申」並びに昭和52年版「学習指導要領」の改訂時期に符合している。

##### (1) 概観

「表7」が、全国調査と対比した小・中学校の教育目標の「表現内容」の調査結果である。県内小・中学校の教育目標の「表現内容」の特性は、戦後30有余年間「自主性」「健康」「協力」の三つが上位

表7 小・中学校の教育目標の表現内容の推移(全国調査対比)

期別 順位	第1期 (昭和22年～27年)		第2期 (昭和28年～32年)		第3期 (昭和33年～42年)		第4期 (昭和43年～49年)		第5期(昭和50年～55年)
	全国(埼玉大調)	新潟県(県教育センタ一調)	全国(埼玉大調)	新潟県(県教育センタ一調)	全国(埼玉大調)	新潟県(県教育センタ一調)	全国(埼玉大調)	新潟県(県教育センタ一調)	新潟県(県教育センタ一調)
1	自主性	自主性	自主性	自主性	健康	自主性	健康	健康	協力量
2	真理の愛好	健康	勤労	健康	協力量	協力量	豊かな情操	自主性	最後までやり通す
3	健康	はっきり話す(発表力)	健康	協力量	勤労	健康	礼儀	協力量	自主性
4	明朗	協力量	誇りをもつ	学力・学習態度	自主性	よく考える	規律	よく考える	よく考える
5	個性の尊重	学力・学習態度	美意識	明朗	責任	最後までやり通す	実践力	豊かな情操	健康
6	生活力	明朗	真理の探究	よく考える	感謝	学力・学習態度	勤労	最後までやり通す	たくましさ
7	責任	よく考える	学力	はっきり話す(発表力)	学力	明朗	たくましさ	明朗	豊かな情操
8	正義	礼儀	まじめさ	最後までやり通す	実践力	実践力	創造性	体力	体力
9	勤労	規律	明朗	豊かな情操	明朗	豊かな情操	明朗	学力・学習態度	学力・学習態度
10	勤労	まじめさ	人間性	実践力	勉強にほげむ	責任	責任	実践力	明朗
11	水仕	責任	美意識	美意識	努力力	善悪の判断	協力量	たくましさ	知性
12	まじめさ	基礎能力	実践力	きまり	研究的態度	勤労	気力	創造性	実践力
13	実践力	計画性	ねばり強さ	創造性	創造力	創造性	学力	勤労	積極性
14	努力力	豊かな情操	よく考える	勤労	個性の伸長	体力	真理の探究	責任	気力
15	誇りをもつ	水仕	生活力	積極性	自他の人格の尊重	積極性	愛情	発表力	創造性
16	礼儀	勤労	なまけない	責任	最後までやり通す	発表力	誇り	規律	規律
17	規律	最後までやり通す	勇気	社会性	善悪の判断	自他の人格の尊重	体力	気力	愛情
18	合理性	科学性	勉強にほげむ	人間性	よく考える	合理性	自主性	知性	勤労
19	信頼感	個性の尊重	愛徳心	真理の探究	豊かな情操	計画性	誠実	向上心	正義
20	誇りをもつ	正義	協力量		(助け合い、しつけ)	きまり	(郷土・国を愛する調和)	積極性	責任
						たくましさ		目標をもつ	誠実
						礼儀		問題解決力	発表力
						努力力			

を占めていることである。埼玉大学の全国調査では、4期を通じて、常に上位に登場しているのは「健康」「明朗」「勤労」である。「健康」については、全国と県は全く一致している。「明朗」についてもほぼ一致しているといえよう。「自主性」については、県では、一貫して上位にあるが、全国では第4期には上位の10のうちから消えている。また県で常に上位にある「協力」は、全国では第3期に2位を占めているが、他の期には10位以内に見られない。以上のことから、県の「自主性」「協力」は、独自の傾向と解することができるようである。

他に県の特長と考えられるものに「はっきり話す(発表力)」がある。第1期(3位)第2期(7位)に上位を占めている。20年代における県の特筆すべき傾向である。また「学力・学習態度」「よく考える」が一貫して10位以内の上位にあることも大きな特性である。常に学力の問題が学校教育で取り上げられていることを物語っている。「最後までやり通す」が第2期以後次第に上位に位置づいて来ていることも大きな特性といえよう。

全国で、通して10位以内の上位にある「勤労」は、県では10位以内に見られない。県民性のしからしめるところであろうか。

## (2) 第1期の傾向

戦後初期の傾向については11頁の「表3」を通してかなり詳細に述べておいた。第2期以降を述べるのに関連した点のみについて簡潔に考察しておこう。県が全国と共通していることは「自主性」「健康」「明朗」の三つだけである。10位以内にある他の7つについては共通していない。特に「はっきり話す(発表力)」「協力」「学力・学習態度」「よく考える」は県の特長と考えられる。



### (3) 第2期(28年～32年)の傾向

「自主性」が、県・全国共に1位で一致している。第1期・第2期 通して同じである。「健康」は県は2位で、第1期と同じく、全国でも3位で第1期と同じである。10位以内で、県が全国と同じ傾向を示しているのは「学力・学習態度」「明朗」の二つに過ぎない。県の特性の一つとして考えられる「協力」が3位を占めていることは注目すべきである。「はっきり話す(発表力)」が7位を占めている点も、第1期に続いて県の独自性と考えられるであろう。第2期に「最後までやり通す」と「実践力」が上位に見られるのは県の新しい傾向を示すものといえるのではないか。

全国では「誇りをもつ」が4位になっている。これについて埼玉大学では「昭和27年(1952年)のわが国の独立に伴って、郷土・国家に『誇りをもつ』人間の育成が、しばしば強調されて」いることを考察に加えている。また「学力」について「戦後におけるいわゆる経験学習に対する批判ともかかわって、基礎的な『学力』向上についてもかなりのウェイトがかけられている」ことを指摘している。県の「学力・学習態度」が4位に、「よく考える」が6位にと、第1期より上位を示していることも全国と同じ傾向を示しているように思われる。

### (4) 第3期(33年～42年)の傾向

県では「自主性」「協力」「健康」と、第2期に引き続き高順位を占めている。全国でもこの三つは4位以内にあるが、「勤労」が3位になっている点に県との違いがある。県の場合「表7」に示した通り、「勤労」については、22年以来、16位以内にはあることを付記しておきたい。「よく考える」「学力・学習態度」は、第2期と逆転しているが、両者が高順位を保っていることは、考える力を育て、学力を高めようとする学校教育の努力の方向が伺われる。また「最後までやり通す」が第2期よりさらに高順位になっている。これは「実践力」と相まって、積極的な行動・態度を育てようということ、学習におけるねばり強い探求の構えを願っているものと考えられる。

県では、「協力」「責任」の二つが、社会的資質にかかわるものとしてあげられるが、全国では「感謝」を加えて三つがあげられている。さらに10位以下には「自他の人格の尊重」が、県・全国共に見られる。

県の独自の傾向として目立っていた「発表力」は、第3期以後10位以内に見られなくなり、15位以下にあるに過ぎない。

### (5) 第4期(43年～49年)の傾向

県・全国共に「健康」が最も多い。県では「自主性」「協力」が引き続いて2位・3位を保持し、強調されている。これに比べて、全国では「協力」が10位「自主性」が18位ときわめて大きく後退している。いかなる理由によるのであろうか。特に「自主性」が第1期・第2期に1位、第3期に4位であったことと考え合わせると、余りに大きな変化といえよう。それに比べ県では、「自主性」が1位・2位と最高位を保持し続けている。

10位までの高順位の目標内容で、県と全国で共通しているものは「健康」の他「豊かな情操」「明朗」「実践力」の四つである。県では10位までの内容のうち、第3期と変わったのは「責任」が14位となり、新たに「体力」が8位となっており、新しい傾向を示している。

全国では、10位以内に「礼儀」「規律」「責任」の規範性の強い価値の強調が見られるが、県では、10位以内にはない。10位以下に「責任」と「規律」が見られるが「礼儀」は見られない。県では、戦後当初には「礼儀」「規律」「責任」と、規範性の強い価値が強調されたが、徐々に少なくなっている。

全国で「たくましさ」「創造力」が7位・8位と高順位を占め、新しい特徴といえる。同じように、県でも「たくましさ」「創造性」が、11位・12位に見られるのは共通した新しい傾向と考えられる。

(6) 第5期（50年～55年）の傾向

ここに示した傾向は、昭和50年から55年までの最近6年間の実態である。全国の資料がないので、県についての考察を加えてみたい。「協力」「自主性」が1位・3位を占め、「健康」が5位と、戦後一貫して、県内小・中学校の教育目標の内容として強調されている。

第5期の最も注目すべき特色は「最後までやり通す」（2位）「たくましさ」（6位）そして「体力」（8位）が10位以内の高順位で強調されていることである。最近の子どもの弱さを克服しようとする学校教育の切実な願いが表わされていると考えられようか。精神的にも、肉体的にも強い子どもの育成を意図した願いが込められているのであろう。学習面では、ねばり強く探求し、最後まで考え抜き、自ら学ぶ学習態度の形成を目指しているものである。そういう意味では「よく考える」「学力・学習態度」が強調されていることと深いかかわりを持っている。じょうぶな体を作るという立場からは、「たくましさ」「体力」の強調と相まって「健康」な子どもの育成と深いかかわりがあるように思われる。

さらに「実践力」「積極性」「気力」が12位・13位・14位にあることと考え合わせると、最近の教育目標に描く子ども像に、たくましい気力・体力を持ち、ねばり強くやり抜く“強さ”が求められているように考えられる。

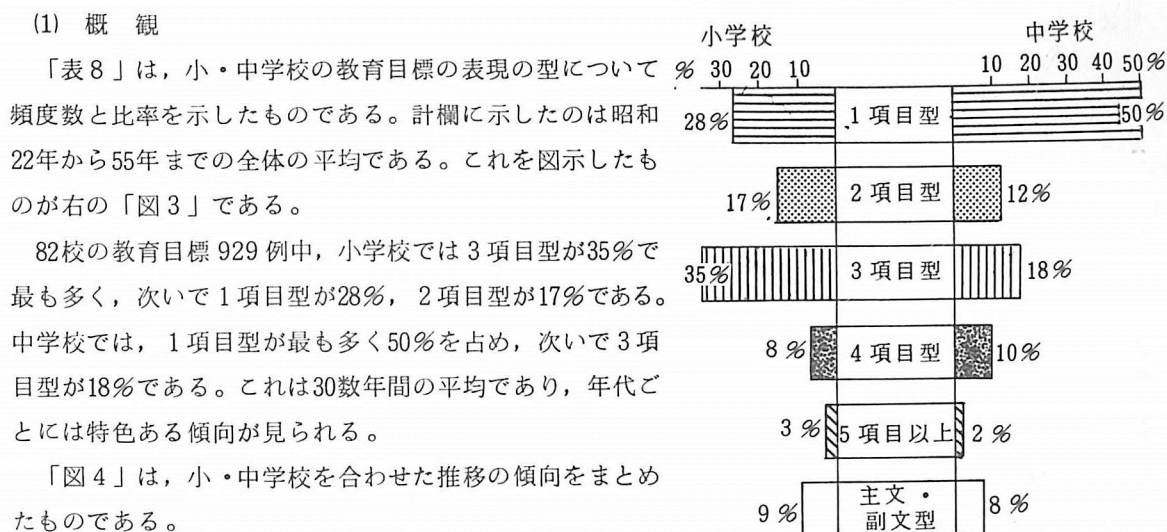
2. 「表現の型」の推移

表8 小・中学校の教育目標の表現の型（頻度数と比率）

校 種		小 学 校（55校）							中 学 校（27校）							合 計（82校）						
目標項目		1	2	3	4	5 以上	主文 副文	計	1	2	3	4	5 以上	主文 副文	計	1	2	3	4	5 以上	主文 副文	計
1期	数	54	34	39	11	7	6	151	38	4	10	7	3	2	64	92	38	49	18	10	8	215
	%	35	23	26	7	5	4	100	59	6	16	11	5	3	100	42	18	23	8	5	4	100
2期	数	39	18	32	14	8	12	123	24	9	12	1	1	5	52	63	27	44	15	9	17	175
	%	31	15	26	11	7	10	100	46	17	23	2	2	10	100	36	15	25	9	5	10	100
3期	数	35	42	69	12	6	18	182	41	15	18	16	1	10	101	76	57	87	28	7	28	283
	%	19	23	38	7	3	10	100	40	15	18	16	1	10	100	27	20	31	10	2	10	100
4期	数	19	11	60	16	1	12	119	24	3	9	1	0	4	41	43	14	69	17	1	16	160
	%	16	9	51	13	1	10	100	59	7	22	2	0	10	100	27	9	42	11	1	10	100
5期	数	32	4	22	1	0	13	72	16	2	2	2	0	2	24	48	6	24	3	0	15	96
	%	44	6	31	1	0	18	100	68	8	8	8	0	8	100	50	6	25	3	0	16	100
計	数	179	109	222	54	22	61	647	143	33	51	27	5	23	282	322	142	273	81	27	84	929
	%	28	17	35	8	3	9	100	50	12	18	10	2	8	100	35	15	29	9	3	9	100



図3 小・中学校の教育目標の表現の型



1項目型を見ると、第1期は42%と最も多い。第2期においても36%で最も多い。昭和20年代では、1項目型が最も多かったことを示している。ところが、第3期・第4期は、27%と全体の4分の1に過ぎない。これに比べて、3項目型が、第3期で31%に増えさらに第4期には42%に増大している。昭和30年代から40年代にかけては3項目型が定着していたこと

図4 小・中学校の教育目標の表現の型 (全体の推移)

期	1 項 目 型	2 項 目 型	3 項 目 型	4 項 目 型	5 項 目 型以上	主文 副文型
第 1 期 (S22~27)	42%	18%	23%	8%	5%	4%
第 2 期 (28~32)	36%	15%	25%	9%	5%	10%
第 3 期 (33~42)	27%	20%	31%	10%	2%	10%
第 4 期 (43~49)	27%	9%	42%	11%	1%	10%
第 5 期 (50~55)	50%	6%	25%	3%		16%
平 均	35%	15%	29%	9%	3%	9%

を表わしている。昭和50年以降(第5期)においては、1項目型が50%と半数を占め、3項目型が25%となっている。第5期の特色の一つに「主文・副文型」、即ち、主目標を掲げ、その後に3項目ないし数項目を掲げている目標が16%に増えている。

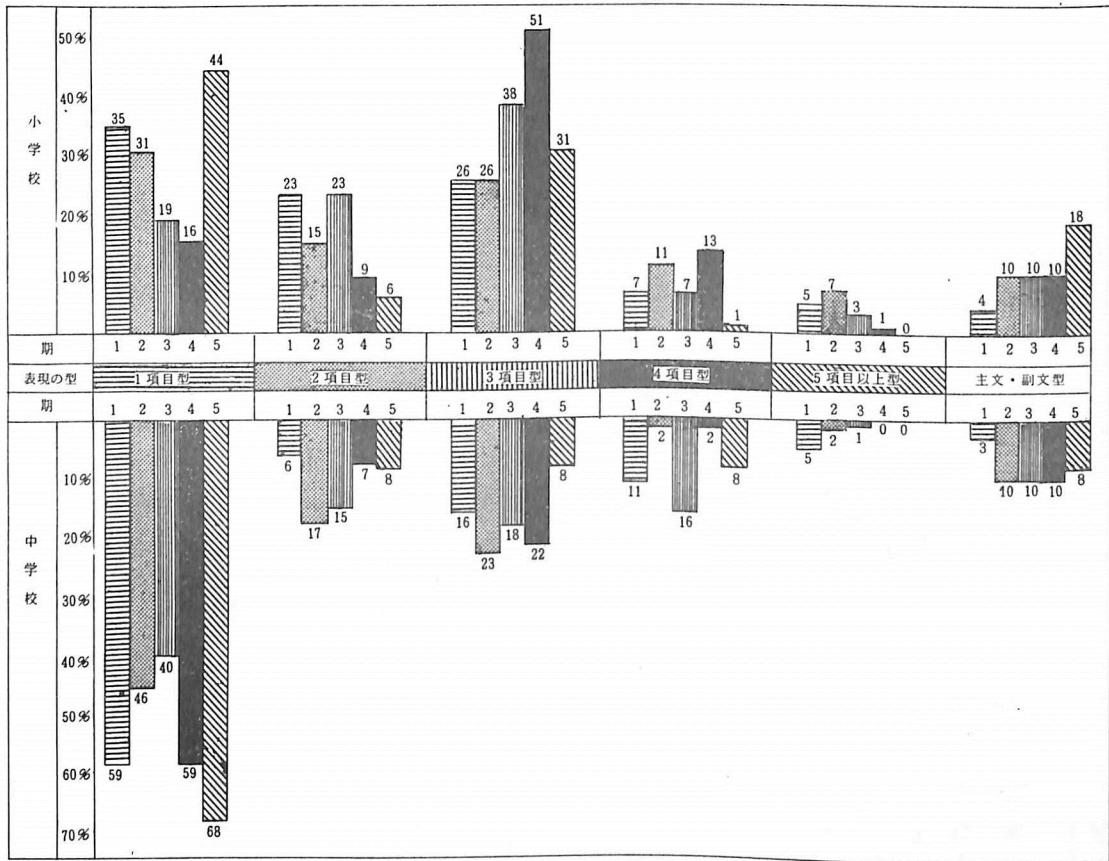
全期間を通して、最も多いのが1項目型(35%)であり、次いで3項目型(29%)、2項目型(15%)

となっている。

表現の型が同じ1項目型であっても、各期ごとにはかなりの違いがある。これについては、項を改めて後述する。

(2) 小・中学校教育目標推移の対比

図5 小・中学校の教育目標の表現の型（推移の対比）



ここでは、小学校・中学校の教育目標推移を対比してみたい。1項目型について見ると、各期総べてにおいて中学校が多い。各期共に中学校は小学校の1.5倍から2倍になっている。第1期から第3期までは、1項目型が小・中学校共に減少しているが第4期では小学校が16%ときわめて少ないのに対し、中学校では59%と増大している。第5期は、小学校44%、中学校68%と最も多くなっている。

中学校では、各期を通して1項目型が圧倒的に多く、他の型は大変少ない。3項目型が、1割ないし2割を占めているに過ぎない。それに比べて小学校では、3項目型が最も多く、特に第3期第4期では

1項目型に代って増大していることに大きな特色がある。第3期には38%, 第4期には51%と急増している。学校教育目標が教育課程編成の基準と考えられ、調和と統一のある全人的育成を目標とした教育課程の実施によって具現化されるべきだという考え方が徹底してきたためではないだろうか。また小学校においては、2項目型が徐々に減ってきているのに比べ、主文・副文型が漸増している。主文・副文型は、1項目型と3項目型の各々の長所を生かし、短所を補正して教育目標を表現していると考えられる。

### (3) 小・中学校教育目標の実例に基づく総合的考察

以上、戦後30有余年の学校教育目標の表現内容と表現の型について述べてきた。ところで、この表現内容と、表現の型は、それぞれ切り離して検討しても、十分な考察ができたとはいえない。年代によって同じ1項目型であっても内容にかなりの違いがある。

例えば、K小学校に昭和24年(第1期)の「思ったことを進んで発表しよう」、26年(第1期)の「勉強好きな明るい子ども」、そして昭和55年(第5期)の「明るく かしく 生き生きと」の三つの教育目標がある。この三つはいずれも一つのまとまった表現と考えれば1項目型ととらえてよいであろう。ところが、各々の表現内容には一つないし三つのものが含まれている。24年の「思ったことを進んで発表しよう」は、発表力を育てたいというとらえ方をすれば一つの内容と考えることが妥当であろう。しかし「思ったこと」(思考力)「進んで」「自主性・積極性」「発表しよう」(発表力)と理解すれば三つの資質とも考えられる。26年の「勉強好きな明るい子ども」は、1文にまとめられてはいても、明らかに内容としては「勉強好きな子ども」(意欲的・学習態度)「明るい子ども」(明朗)の二つのものとしてとらえる方が妥当であろう。さらに昭和55年の「明るく かしく 生き生きと」は、明らかに「明るく」(明朗)「かしく」(知性、学力、創造性)「生き生きと」(生活態度)等ととらえれば三つの内容が考えられる。

昭和24年の「思ったことを進んで発表しよう」は、当時、県内では、メーヤ女史の指導や、県教委の研究指定校の発表による啓蒙時代の特色が表われており、昭和55年の「明るく、かしく、生き生きと」は、子ども向きに、全人的な資質を考慮し、さらに、この教育目標が、教育課程編成の基準と考えられ日々の教育活動を通して、期待する子ども像が具現化されるような願いが込められているように思われる。

このようにK小学校の年代ごとのうち三つの教育目標から見ても、その表現内容、表現の型、そして設定(改訂)の頻度等について歴史的な総合的考察を加える必要がある。

次に数校について、戦後の教育目標の実例をあげ、検討してみたい。

ア 小学校の例

期	年 (昭和)	参 考 事 項	設 定 年	Z 小 学 校	設 定 年	Y 小 学 校
				学 校 教 育 目 標		学 校 教 育 目 標
第一 期	22	学習指導要領を発行 県教委研究指定校 「教育目標達成の過程」 研究・発表 学習指導要領改訂			22	1. べんきょうする子ども（自主的学習） 2. きまりのよい子ども（自治的訓練） 3. 生き生きとした子ども（心身の健康）
	23					
	24		24	◦思ったことを進んで発表するようにしよう。		
	25		25	◦人の話をよく聞き自分の考えをはっきりいましょう。		
	26		26	◦勉強好きな明るい子。	26	1. 生き生きした子ども      2. 明るい子ども 3. べんきょうする子ども
第二 期	28		28	◦進んで勉強する子ども	28	◦子どもらしい子どもの育成
	29		29	◦他人と協力して仕事のできる子ども		1. 生き生きした子ども
	30			◦健康で明るい子ども      ◦情操の豊かな子ども		2. きまりのよい子ども
	31			◦正しい日常生活のできる子ども		3. べんきょうする子ども
	32		32	◦進んで勉強する子ども ◦正しいことばで話せる子ども ◦健康で明るい子ども		
第三 期	33	小・中学校学習指導要領 告示 小学校・施行 中学校・施行 中教審答申				
	34					
	35				36	1. すすんでものごとをする 2. すじ道をたてて考える 3. 困難を克服して最後までやりぬく 4. つよいからだをつくる
	36		37	◦力をあわせて元気でやりぬく子 ・自分のことは自分でする子    ・みんなで仲よくする子 ・よく考え、はっきり言う子    ・明るくゆたかな子 ・自分のからだを大切にする子		
	37			◦自主的な学習、行動ができるようにする ◦学習方法を身につけるようにする ◦美しいものに対して感動するようにする ◦健康に関心をもち、よい習慣をつけさせる		
第四 期	40	中教審答申	40			
	41					
	42					
	43		43	◦明るく心の豊かな子ども ◦進んで勉強する子ども ◦じょうぶで生き生きした子ども	43	◦強く豊かな子ども ・はっきり考えをまとめる ・まっすぐすじ道をたてる ・がんばってくふうする
	44					
第五 期	45	小学校・施行 中教審答申 中学校・施行				
	46					
	47					
	48					
	49					
	50	教育課程審議会答申 小・中学校学習指導要領 告示 小学校・施行				
	51					
	52					
	53				55	◦すじみちを立てて、深く考える子ども（知） ◦豊かな心で、助け合う子ども（徳） ◦体をきたえ、がんばりぬく子ども（体）
	54					
	55		55	◦明るく かしく 生き生きと		

Z 小学校の24年から28年までは、戦後当初、県内の教育目標の典型のように思われる。1項目で、生活の具体的問題と密着した内容である。29年以後は3ないし4項目にわたり、知・徳・体・情を含めたものとなっており、教育目標が調和と統一のある教育課程を編成する基準と考えられて改訂が重ねられている。内容の上からみて、一貫した学校の姿勢が伺える。

Y 小学校は、22年に知・徳・体の3項目の教育目標を設定し、20年代には3回、30年以後3回の改訂である。教育目標を恒常的なものと考え、学校で育てたい児童像が厳しくとらえられており、確かな見直しの上に立て、全人的な人間形成が積み上げられていると理解したい。55年度の3項目は、22年のものに比べ、一段と調和のとれた児童像が歴史的・発展的に描かれている。

期 年 和	設 定 年	学 校 教 育 目 標	W 小 学 校	設 定 年	学 校 教 育 目 標	X 小 学 校
第一 期	22	学習指導要領を発行 県教委研究指定校 「教育目標達成の過程」 研究・発表 学習指導要領改訂	23 ○自主学習の促進 ○体育健康教育の研究 ○丈夫な子 ○明るい子 ○進んでやる子 ○力をのばす ○仲よくする ○丈夫になる ○明るくなる ○力をのばす ○明るくなる ○進んでやる	22	○自主的学習態度の確立 ○社会道徳・正しい言葉の徹底 ○人を尊敬し、物を大事にし、工夫する子どもを養う。 ○明るい学校（○仲よく力を合わせる ○進んで発表する） ○仲よく力を合わせる ○進んで発表する ○丈夫なからだをつくる ○進んでよいことをする ○丈夫なからだ ○正しいことば	23 ○自主的学習態度の確立 ○社会道徳・正しい言葉の徹底 ○人を尊敬し、物を大事にし、工夫する子どもを養う。 ○明るい学校（○仲よく力を合わせる ○進んで発表する） ○仲よく力を合わせる ○進んで発表する ○丈夫なからだをつくる ○進んでよいことをする ○丈夫なからだ ○正しいことば
	23			23		
	24			24		
	25			25		
	26			26		
第二 期	28		28 ○進んでやる ○力をのばす ○工夫してやる ○明るくなる 30 1.進んでまじわり正しくしよう 2.進んで考えよう 3.進んで心をゆたかにしよう 4.進んで力をのばそう 31 1.（同） 2.進んでよくしらべ正しく利用しよう 3.進んで気持ちをのびにしよう 4.進んでからだをしょうぶにしよう 32 ○力を伸ばす ○力をあわせる	28	○丈夫なからだ ○美しいことば ○健康な子ども ○考える子ども ○からだをきたえよう ○工夫する力をのばそう 32 ○からだをきたえよう ○工夫する力をのばそう ○しんぼう強くやりとおそう	28 ○丈夫なからだ ○美しいことば ○健康な子ども ○考える子ども ○からだをきたえよう ○工夫する力をのばそう 32 ○からだをきたえよう ○工夫する力をのばそう ○しんぼう強くやりとおそう
	29			29		
	30			30		
	31			31		
	32			32		
第三 期	33	小・中学校学習指導要領 告示 小学校・施行 中学校・施行 中教審答申	33 ○進んで力をのばす ○力をあわせる 1.進んで物事にとりくみやりとげようとする子ども 2.みんなのことを考えて行動する子ども 3.物事をすなおに考えて判断する子ども 34 1.進んで物事にとりくみやりとげよう 2.物事をすなおに考えて判断する子ども 35 1.物事をすなおに考えて判断しよう 2.進んで物事にとりくみやりとげよう 36 ○強く明るい子ども ○進んで考える子ども ○美しさを求める子ども	35	○しんぼう強くやりとおそう ○工夫する力を伸ばそう 38 ○根気強くやりぬく子ども ○人にめいをかける子ども ○根気強くやりぬく子ども ○進んでよいことをする子ども 40 ○責任をもって仕事をする子ども ○進んでよいことをやる子ども 41 ○正しいことばを勇気をもとう ○よい習慣を身につけ、しょうぶなからだを作ろう ○考える力を伸ばし勉強のしかたを工夫しよう ○仕事に責任をもち、がまん強くがんばろう 42 ○正しい判断力や健全な批判力を養い、たくましく実践する態度を育てる。 ○効果的な学習方法を身につけ、基礎的な知識技能の向上を図り、合理的な創造力を伸張する。 ○個性豊かな情操を高め、健康な生活を送る態度や能力を育てる。	35 ○しんぼう強くやりとおそう ○工夫する力を伸ばそう 38 ○根気強くやりぬく子ども ○人にめいをかける子ども ○根気強くやりぬく子ども ○進んでよいことをする子ども 40 ○責任をもって仕事をする子ども ○進んでよいことをやる子ども 41 ○正しいことばを勇気をもとう ○よい習慣を身につけ、しょうぶなからだを作ろう ○考える力を伸ばし勉強のしかたを工夫しよう ○仕事に責任をもち、がまん強くがんばろう 42 ○正しい判断力や健全な批判力を養い、たくましく実践する態度を育てる。 ○効果的な学習方法を身につけ、基礎的な知識技能の向上を図り、合理的な創造力を伸張する。 ○個性豊かな情操を高め、健康な生活を送る態度や能力を育てる。
	34			34		
	35			35		
	36			36		
	37			37		
第四 期	43	小学校学習指導要領告示 中学校学習指導要領告示 小学校・施行 中学校・施行 中教審答申	43 知・徳・体の調和の発展をはかり、人間として豊かさと真理の探求の態度を育成する。 ○強く明るい子ども ○進んで考える子ども ○美しさを求める子ども	45	○豊かな情操を身につけ、明るくいきいきとした生活態度を養う。 ○創造的な思考力や表現能力を伸ばし、意欲的な学習をすすめる。 ○健康へのよい習慣を身につけ、積極的に体力の向上をめざす。 ○積極的に物事にとりくみ、たくましく実践する能力を養う。 46 ○すすんで学習する習慣を身につけ、基礎学力を高めるとともに、創造的な思考力や表現能力を伸ばす。 ○豊かな情操を身につけ、明るくいきいきとした生活態度を養う。 ○健康な生活を送る態度や習慣を身につけ、積極的に体力の向上を図る。 ○協力的なものごとにとりくみ、たくましく実践する能力を養う。	45 ○豊かな情操を身につけ、明るくいきいきとした生活態度を養う。 ○創造的な思考力や表現能力を伸ばし、意欲的な学習をすすめる。 ○健康へのよい習慣を身につけ、積極的に体力の向上をめざす。 ○積極的に物事にとりくみ、たくましく実践する能力を養う。 46 ○すすんで学習する習慣を身につけ、基礎学力を高めるとともに、創造的な思考力や表現能力を伸ばす。 ○豊かな情操を身につけ、明るくいきいきとした生活態度を養う。 ○健康な生活を送る態度や習慣を身につけ、積極的に体力の向上を図る。 ○協力的なものごとにとりくみ、たくましく実践する能力を養う。
	44			46		
	45			47		
	46			48		
	47			49		
第五 期	50	教育課程審議会答申 小・中学校学習指導要領 告示 小学校・施行	55 ○進んで考える子ども ○美しさを求める子ども ○たくましくのびる子ども	53	○学習にげむ子ども ○明るい心のびる子ども ○強い体の子ども ○やる気のある子ども 54 ○自ら学び、自ら鍛えあげようとするたくましい心身をもった小学校の子ども育成	53 ○学習にげむ子ども ○明るい心のびる子ども ○強い体の子ども ○やる気のある子ども 54 ○自ら学び、自ら鍛えあげようとするたくましい心身をもった小学校の子ども育成
	51			54		
	52			55		
	53					
	54					

W小学校とX小学校は、教育目標の推移にかなり似た点が見られる。20年代はほとんど毎年、設定（改訂）が行われている。そして2ないし4項目でわかり易い言葉で具体的に表現している。30年代では、一つの表現に二つくらいの資質を含めている場合が多い。W小学校では43年に、教師向けの表現と児童向けの表現を掲げている以外、児童向けの教育目標になっている。それに比べ、X小学校では、42年、45年、46年の3回の改訂はすべて教師向けになっている。内容は、知・徳・体・情の面にわたり、細かく資質をあげ、調和のとれた全人的な児童像が描かれている。

55年度はW小学校は3項目で、子ども向けに、X小学校では1項目で教師向けになっている。1項目、3項目の違いはあっても内容の上では、その学校の児童像が全人的に描かれている。

イ 中学校の例

期	年 (昭和)	参 考 事 項	設 定 年	U 中 学 校	設 定 年	V 中 学 校
				学 校 教 育 目 標		学 校 教 育 目 標
第 一 期	22	学習指導要領を発行 県教委研究指定校 「教育目標達成の過程」 研究・発表 学習指導要領改訂				
	23					
	24		24	◦進んで仕事をする。 ◦衆のために率先する。	24	◦協力して仕事をしましょう。
	25			◦そして健康に重きを置くようしつける。		
	26		25	◦農業を中核とした職業・家庭科を中心として農村の地域 社会に適合した実際の教育をすすめる。	26	◦協力して、仕事のできる人になろう。
第 二 期	28		28	◦みだしなみを良くして、学校を美しくしょう。	28	◦主体的な生活態度を涵養する。
	29			◦基礎的能力を伸ばそう。		◦創造性を高め、勤労愛好の態度を涵養する。
	30		30	◦みだしなみをよくしよう。 ◦進んで物事をやろう。	29	◦自主的精神にみち、強い責任感を持つ生徒の育成
	31			◦基礎学力を伸ばそう。		◦健康明朗にして、積極的・合理的に仕事をする生徒の育 成
	32				31	◦進んで物事を学ぶ。
第 三 期	33	小・中学校学習指導要領 告示  小学校・施行 中学校・施行  中教審答申	33	◦進んでものごとをやろう。	33	正しい判断力を身につけるー規律を重んじ、協同意識を高 めるー
	34					◦積極進取（すすんでがんばる）
	35		35	◦学力を高めよう。 ◦態度ある言動をとろう。		◦自主独立（努めて実力をたくわえよう）
	36					◦協力一致（礼儀を正し、公共物を大切にしよう）
	37		37	◦学力を高めよう。 ◦はきはきした言動をとろう。	36	正しい判断力を身につける
	38					◦責任を重んじ、よく協力する
	39		39	◦励ましあって言動を活発にしよう。		◦進んで学び、よく実行する
	40			◦積極的に学習にとりくみ、学力を高めよう。		◦礼儀を正し、公德心を養う
	41		41	◦真剣に物事に取り組み、困難にくじけず、勇気をもって やり抜こう。	41	◦真理を愛し、進んで学習する生徒
	42					◦自ら計画し自主的に活動する生徒
第 四 期	43	小学校学習指導要領告示 中学校学習指導要領告示  小学校・施行 中教審答申 中学校・施行	43	◦進んで学習に取り組み、学力を高めよう。		
	44			◦励ましあい、教えあって言動を活発にしよう。		
	45		44	◦進んで物事に取り組み、困難にくじけず、勇気をもって やり抜こう。	45	1. めあてをもち、すすんで学力の向上と健康の増進に つとめる。
	46					2. はつらつとして、健全な中学生らしい生活態度をも つ。
	47		48	◦進んで考えを出し合い、真剣に物事に取り組み、気力を もってやり抜く。		3. みんなで協力し、明るく楽しい学校にする。
	48					
	49					
第 五 期	50	教育課程審議会答申 小・中学校学習指導要領 告示  小学校・施行			51	豊かな心をもち、みんなと共にたくましく生きる。
	51					
	52					
	53					
	55		55	◦進んで学びとる生徒 ◦思いやりのある生徒 ◦たくましく鍛える生徒	55	知性を磨き、自主・協調性に富む、積極的な生徒

U中学校の24年・25年の教育目標、V中学校の24年・26年の教育目標は、戦後当初の混乱した設定状況にあったことを物語っている。U中学校では終始生徒向けの表現をとっている。内容の上からは「学力」と「言動」が強調し続けられており、「進んで」が常に前提におかれている。V中学校では、28年29年と密度の濃い資質が掲げられている反面、31年では、がらりと変った1項目の目標となり、設定(改訂)の意図に変化を感じる。33年、36年は、主文・副文(3項目)によって表現されているが、いわゆる知・徳・体・情の資質が含まれているとは限らない。41年、42年、45年は3ないし4項目となっているが、51年には1項目となり、内容も、この表現から見ると、かなり変化している。55年には、両校共に全人的な生徒像が描かれ、調和のとれた教育課程編成の基準が明らかにされているように思われる。



V 幼稚園・小学校・中学校・高等学校の教育目標の関連

表 9 校種別教育目標の表現内容

順位	幼稚園		小学校		中学校		高等学校	
	表現内容	設定率%	表現内容	設定率%	表現内容	設定率%	表現内容	設定率%
1	友達と仲よく	74.9	よく考え・工夫	42.9	自主性	25.9	自主性	54.8
2	健康・じょうぶ	52.9	健康(心身・安全)	34.6	実践力・行動力	24.1	基礎学力の充実	49.5
3	明るく	49.0	やりぬく	32.3	健康(心身・安全)	23.1	心身の健康	45.2
4	よく考えて	39.2	協力・連帯	25.6	やりぬく	19.4	体力	38.7
5	創造性・工夫	39.2	たくましい	25.2	協力・連帯	18.5	創造性(力)	32.3
6	元気よく	37.2	明朗	24.8	心豊か・情操	17.6	責任感	24.7
7	がんばり・やりぬく	31.3	すすんで学ぶ・学力充実	17.7	すすんで学ぶ・学力充実	15.7	自律的	22.5
8	自主性	13.7	実践力・行動力	13.2	よく考え・工夫	14.8	気力	22.5
9	じょうずに聞き・話す	13.7	思いやり	12.0	積極的・意欲的	14.8	豊かな情操	22.5
10	基本的生活習慣	13.7	自主性	12.0	創造性	12.0	実践(行)力	20.4
他(きまを守り、豊かな心 思いやり、たくましさ)			(心ゆたか、情操、ねばり強い 創造性、かっこいい、知性)		(たくましい、かっこいい、知性 判断力、明朗)		(豊かな人間性、勤労、積極性 真理の探求、明朗)	

(54年度 公立幼稚園 51園調査) (54年度 中越教育事務所管内、小学校 266 校、中学校 108 校調査) (55年度 県立高等学校 93校調査)

「表 9」は、54年度ないし55年度の幼稚園・小学校・中学校・高等学校の校種別に見た教育目標の表現内容である。調査方法や整理の仕方が必ずしも一致していないが、県下の傾向を十分に察知し得ると考えている。以下、校種別の特色と校種間の関連について若干の考察を加えてみたい。

1. 幼稚園

「友だちと仲よく」が約75%の設定率である。全幼稚園の三分の二が「友だちと仲よく」することを教育目標に掲げていることは大きな特色といえよう。合わせて「明るく」が約半数あり、友だちと仲よく遊び、明るく生活することを目指している。そしてその根底に「健康・じょうぶ」な体を約53%の幼稚園で目指している。資質として考えるならば「協力」「健康」「明朗」の三つがきわめて強調されていることがわかる。次いで「よく考えて」と「創造性・工夫」が約40%近い。思考力、創造力の育成が幼児教育においてもかなりの関心が寄せられている。「元気よく」が約37%を占めていることも一つの特色といえよう。

2. 小学校

「よく考え・工夫」が約43%と最も多い。次いで「健康(心身・安全)」が約35%である。「やりぬく」(約32%)「たくましい」(約25%)が各々高順位を占めている。「協力・連帯」(約26%)「明朗」(約25%)が多いのも一つの特色である。

### 3. 中学校

「自主性」が約26%で最も多く、「実践力・行動力」(約24%)「健康(心身・安全)」(約23%)が次いでおり、いずれも約四分の一の学校で設定されている。「やりぬく」「協力・連帯」が約20%近くを占め、「心豊か・情操」が約18%と関心が高くなっている。中学校では、特に集中した表現内容が見られない。

### 4. 高等学校

「自主性」が約55%で最も多い。「基礎学力の充実」が約50%を示していることは大きな特色である。さらに「心身の健康」が約45%、「体力」が約39%を占め、両者合わせて8割有余の学校で健康、体力づくりを教育目標に取り上げていることになる。「創造性(力)」「自律的」「気力」「豊かな情操」「実践(行)力」等のように個人的資質にかかわるものが多い。その中において、「責任感」が約25%を占め、6位になっていることが注目される。

### 5. 幼稚園・小学校・中学校・高等学校の関連

幼稚園・小学校・中学校・高等学校の各校種を通して共通にいえることは「健康」の設定率が高いことである。幼稚園・小学校で2位、中学校・高等学校で3位を占めている。幼稚園の「友だちと仲よく」(協力)は1位で約75%ときわめて高い設定率を示しているが、小学校では「協力・連帯」が4位(約26%)、中学校では「協力・連帯」が5位(約19%)と徐々に低くなり、高等学校では10位以内には見られない。高等学校では、幼稚園・小学校・中学校では見られない社会的資質の「責任感」(6位、約25%)が重要視されており、「協力」が「責任感」として生徒の望ましい期待像に考えられているものと解し得るのではなかろうか。幼稚園の「明るく」は小学校で6位、中学校・高等学校では10位外にあり、高学年になるにしたがって低くなっている。幼稚園での「よく考えて」「創造性・工夫」の知的な面では、小学校で「よく考え・工夫」が1位(約43%)、「すすんで学ぶ・学力充実」が7位(約18%)、中学校では「すすんで学ぶ・学力充実」が7位(約16%)、「よく考え・工夫」が8位(約15%)となっている。さらに高等学校では「基礎学力の充実」が2位(約50%)、「創造性(力)」が5位(約32%)と変化している。次に、幼稚園での「がんばり・やりぬく」が7位(約31%)を占め、小学校でも「やりぬく」が3位(約32%)、「たくましい」が5位(約25%)、中学校では「やりぬく」が4位(約19%)となっている。高等学校では「責任感」「気力」等が重要視されている。「自主性」については、幼稚園で8位(約14%)、小学校では10位(12%)であるのに比べ、中学校(1位、約26%)、高等学校(1位、約55%)と最も設定率が高いことは大きな特色と考えられる。中学校・高等学校の段階で「自主性」が教育目標に最も多く掲げられているのは、成長発達に応じたものと考えると共に、県民性との関連も考えられるのではないだろうか。

以上、校種別の特色を関連づけて考察したが、成長発達段階に応じて設定率の高・低の変化のあるもの、一貫して重要視されているもの、あるいは幼稚園と小学校と関連が深いもの、中学校と高等学校と関連が深いもの等の傾向があることに気がついた。

## VI ま と め

県内における戦後約35年間にわたる学校教育目標の推移に関心を寄せ、ささやかな考察ではあったが、学校教育の発展に関する理解にいくつかの収穫を得ることができた。以下、研究を通して得た要点をまとめてみたい。

◎ 戦後当初における県内小・中学校の教育目標の設定状況、表現内容・型等に独自性が見られた。教育基本法・学校教育法に示された教育の目的・目標を受けて、学習指導要領に「教育目標」に対する考え方が明らかにされた。県内における当時の教育事情が占領下の進駐軍関係者の影響や、研究指定校での教育目標と実験目標のとらえ方、発表会を通しての理解の不徹底等に起因し、必ずしも学習指導要領に示されている「教育目標」の考え方が実現されていない傾向も見られた。1項目で、具体的な生活の問題が教育目標として掲げられ、学校教育の全般を通して全人的な人格の完成を目指す、調和と統一のある教育課程の根本的な基準となり得ないものが多かったようである。各学校における教育目標の受けとめ方にかなりの開きがあり、困惑の様子が見られた。しかし、設定状況の調査から県教委の研究指定校の研究の成果と普及の効果が大きかったことは事実である。

◎ 学校教育目標の設定状況は、戦後当初の昭和20年代には、大部分の学校が毎年か隔年に設定(改訂)が行われていた。30年代以後、総体的には、徐々に設定(改訂)率が低くなってきており、特に45年以降、教育目標の恒常性が定着してきたといえる。教育目標の設定(改訂)の状況は、学習指導要領の告示や施行の時期と深い関係がある。また40年頃、県教委による学校教育目標と教育課程の大綱についての指導による効果が、設定(改訂)の推移に表われている。設定(改訂)の回数では、およそ三分の二の学校で6回から15回の設定(改訂)を行っている。

◎ 学校教育目標の表現内容の特色は、戦後約35年間、「自主性」「健康」「協力」の三つが上位を占めている。個人的資質に関係した「自主性」「健康」と社会的資質に関係した「協力」とが相まって、県内小・中学校の教育目標に掲げられてきている。また、第1期・第2期(昭和22年～32年)の10年間、「はっきり話す(発表力)」が、上位を占めているのは、前述した三つの表現内容と合わせて、県内の特色といえるだろう。さらに「よく考える」「学力・学習態度」が一貫して10位以内を占めていることや、「最後までやり通す」が最近増大してきていることも注目しなければならない。

◎ 学校教育目標の表現の型は、約35年間を通して、小学校では3項目型が35%で最も多く、次いで1項目型が28%である。中学校では1項目型が50%と他に比べてきわめて多い。期別に見ると、小・中学校合わせて、1期・2期では1項目型が最も多く、3期・4期では3項目型が最も多い。そして5期では1項目型が50%と圧倒的に多くなっている。ただし、項目数が1項目だからといって、含まれる表現内容が三つ位になっているものが多いことを考慮しなければならない。

◎ 最近における幼稚園・小学校・中学校・高等学校の教育目標には深い関連があることに気がついた。各校種を通して共通にいえることは、「健康」の設定率が高いことである。幼稚園の「友だちと仲よく」は小学校・中学校の「協力・連帯」へとつながり、社会的資質の重視が見えるが、高等学校になると「責任感」として社会的資質の重視に変っている。各校種共に、概して個人的資質が教育目標に多く取り上げられている。

参 考 文 献

県教委・指導課刊：研究紀要第1集「教育目標達成の過程」(昭和25)

県教委刊：新潟県教育百年史 昭和後期編(昭和51)

新潟市教委刊：新潟市義務教育史 昭和編(2)(昭和51)

国立教育研究所編：文部省 学習指導要領 1. 一般編 日本図書センター(昭和55)

県教委義務教育課編：学校教育実践上の努力点(各 年)

丸山新七著：これからの学校を考える 野島出版(昭和55)

上滝孝治郎他共著：日本の学校教育目標 ぎょうせい(昭和53)

奥田真丈他編：現代学校教育全集3 教育目標 ぎょうせい(昭和54)

奥田真丈他編著：現代教育目標事典 ぎょうせい(昭和54)

伊藤和衛著：教育課程の目標管理 明治図書(昭和53)

原 実 著：新しい学校経営の条件 学陽書房(昭和52)

教育調査研究所刊：教育展望 第26巻第2号 学校教育目標を見直す(昭和55)

富山県教育センター刊：学校教育目標の具現化(昭和51)

現代教育研究協会刊：研究紀要第1集 学校の教育目標に関する研究調査(昭和50)

新潟県立教育センター刊：研究集録第4集 学校教育目標の具現化に関する調査研究(昭和46)

〔Ⅰ〕

同 刊：同 第5集 同 〔Ⅱ〕(昭和47)

同 刊：研究報告第10号 学校経営の最適化に関する研究(昭和52)